

NPO 法人

全日本語りネットワ-ク

〒185-0021 東京都国分寺市南町 2-18-3

2020. 8. 10 発行

国分寺マンション B-03A

(FAX) 0237-67-7001

(HP) <http://japankatarinet.jp/>(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(振替) 00130-2-114808

ニュース

紙芝居フェスティバル in Mexico

荒木文子（茨城県古河市）

2019年11月14日から25日にかけてメキシコの「世界紙芝居フェスティバル」に招かれました。メキシコという国についてサボテンとタコス以外あまり知識もなく「どうやらメキシコでは紙芝居が人気らしい」また「なぜ？メキシコで紙芝居フェスティバルが？」と疑問を抱えたままの初めて海外への一人旅でした。成田空港を飛び立ってから約16時間、メキシコシティに到着。その後国内線に乗り継ぎ北に向かって2時間。到着したのはモンテレーというメキシコでは3番目に大きい市でした。これから先通訳してくれるエテリーとメキシコシティのストーリーテラー、デヤニラが迎えに来てくれました。なぜかホッとしました。その夜は、モンテレーでのフェスティバルの主催者であり、エテリーのお母さんでもあるテレさんたちとも合流し、チキンの夕食を頂き、ベッドに入りました。

翌日からの5日間のモンテレーでの紙芝居フェスティバルはとても忘れがたい日々となりました。15日はオープニングでペルーのレニン、コロンビアのミゲル、国内からメキシコシティのデヤニラ、ベラクルスのロレンツィオ、モンテレーのロベルト、ドラ、グレース、エテリー、テレがそれぞれパフォーマンスしました。紙芝居は誰もが演じましたが、他に人形劇だったり語りだったり大道芸だったり、みんななかなかのパフォーマーで感心しました。秘かに「これは負けられない！」と誓ったのは言うまでもありません。私はとことこ人形忍者を使いながら『まんまるまんまたんたかたん』『わにがめんどりをたべないわけ』を演じました。スペイン語はとでもできませんので日本語です。通訳付きですが観客と心がつながった実感はありました。紙芝居の持つ力を再認識しました。それにしてもみんな陽気で気さくですぐ「ぶんちゃん」とも呼んでくれました。

さて、みんなが「紙芝居」をしたと簡単に述べましたが、実はこの「紙芝居」がそれぞれ違っていました。日本の紙芝居を買うのは困難ですから、舞台もストーリーもすべて手作りです。舞台は本当に my stage なのです。簡単に人に貸しません。白や緑や青などで塗られ絵も描かれていて、しかも右からも左からも上からも絵が抜けます。舞台は黒か茶、立つ位置もいつも同じという私の目からウロコがぼろぼろでした。

その後アメリカに行くに行けない人が沢山滞在している移民局、十分に食べられない子どもたちを集めて食事をあげている所、山の中の小さな小学校、野外劇場、裕福な子どもたちの集まる図書館で公演しました。メキシコという国を肌で感じながら、ハードな日々でしたが、どこでも大歓迎してくれました。また日本人は珍しいとみえて写真攻めにもあいました。

11月19日、夜行バスでデュランゴへ向かいました。デュランゴではさらに大きな紙芝居フェスティバルが待っていました。ここでは『教育と紙芝居』という本も出版されているマリアフェさんが主催者です。モンテレーのメンバーの他にベネズエラ、チリ、アメリカ、プエルトリコ、日本から紙芝居文化の会の道山由美さんも加わりました。翌20日、400人も入る会場でのカンファレンスでした。いつものことながら、その日の朝にはっきりするスケジュールに驚きました。午前中は道山さん、午後が私の講演だったのです。違う演じ方をする2人が1日のうちに、しかも同じステージで演じるなんて！でもこんなことはメキシコだからできるのだと思い直し、「やるしかない！わたしはいつものようにやればい」とステージに立ちました。客席は教師、家族連れなどでいっぱいでした。道山さんは堂々と発表し拍手喝采を受けました。

私はまずは日本にはいろいろな紙芝居があり演じ手も様々であること、舞台は世界最小の劇場だと思っているのでライトも幕紙も拍子木も使うことを伝え、いつもの2作の他に『したきりすずめ』『ひもかとおもったら』を演じました。質問のコーナーでは当然ながら聞かれました。「全然違うものを見せられたがどうすればいいのかわか」。私は「紙芝居はいろいろあっていい。どちらかを選ぶのは皆さんご自身です」と答えました。その方は「では私は後の方を選ぶわ」と言ってくれました。その後、6歳位の蝶ネクタイの紳士が観客の目をくぎ付けにし、2度舞台上がり握手とチュウインガムのプレゼントがありました。遠くまで来た甲斐がありました。翌日のカンファレンスに出番はありませんでしたが質問しました。舞台になぜ絵やら色を塗るのかと。答えは「それは文化の違いでありメキシコ人のスピリットだ！」でした。

メキシコでは小学校に紙芝居が授業に取り入れられていて、子どもたちは自分で舞台、話を作り絵を描いて家族や友人に見せています。自分の考えをまとめ発表するのに最適な教材になっているようです。このあとフェスティバルは続いていましたが、私は時間切れで帰国しました。今、紙芝居は世界の「KAMISHIBAI」になっていることを実感した旅でした。同時に紙芝居の魅力をもっと世界に発信したいと思いました。